

ナスルッラーのペルシア語訳 『カリーラとディムナ』

「第3章 数珠かけ鳩」の日本語抄訳

加藤 純子（中東文化研究家）

本稿の初出は、言語と交流研究会編集『言語と交流 第21号』平成30年発行、33ページ～41ページであることをお断りいたします。

はじめに

『カリーラとディムナ』は釈迦以前から存在するインド起源のサンスクリットの説話パンチャタントラ（5章の物語）⁽¹⁾にもとづく物語で、その名は原典の初めに登場するカラタカとダマタカという2匹の豹に由来する。この説話は東西60カ国語に翻訳され、ほぼ200種のテキストがある⁽²⁾。西欧ではビドパーイの物語とも呼ばれる。そして東西の説話文学に多大な影響を及ぼし、世界文化交流史及び世界文学史上、重要な地位を占めている⁽³⁾。

本抄訳は、ナスルッラー・ムンシーによるペルシア語の翻訳から、筆者が日本語訳にしたものである。ナスルッラー・ムンシーについては、後述する。

6世紀サーサーン朝のホスロー・アヌーシールワーン（ホスロー一世、在位531-579）が医師ブルゾーエをインドに派遣してこの書の写本を求めさせ、中世ペルシア語に翻訳させた。それは570年ころ初期のシリア語やアラビア語にも訳された。

イブヌ・ル・ムカッファイ⁽⁴⁾によるアラビア語訳がウマイヤ朝の時代750年頃書かれ、それが現在まで伝わるものである。彼はイラン南部ファールス地方のフィールーザーバードの貴族の家に生まれた。父ダードエはイスラーム名をムバラクと言い、地租徴税官であった。しかし公金横領の疑いで拷問を受け恐怖と打撲で片手が委縮し、「アル・ムカッファ」（ひきつった者）の異名を得た。息子ローズビフはゾロアスター教徒であったがイスラーム改宗後アブドゥラー・イブヌ・ル・ムカッファイと称した。彼は恵まれた少年時代をバスラで過ごし、行き届いた教育を受けた。美しいアラビア

語を話すベドウィンを含む2人の教師のもとで熱心にアラビア語を学び、極めて利発であった⁽⁵⁾。成長後ウマイヤ朝次いでアッバース朝のカリフに書記として仕え、達文・雄弁で名高かった。しかしザンダカ⁽⁶⁾としてカリフ・マンスールによって処刑され死亡した⁽⁷⁾。彼は『カリーラとディムナ』以外にも『アル・アダブ（文学）』（「大アダブ」「小アダブ」）などの著作があるが散逸した。イブヌ・ル・ムカッファイの『カリーラとディムナ』は中世ペルシア語から直接訳したもので、物語は主としてインド、思想教養はペルシアおよびアラブ、形式はアラビア語という三文明を融合させたものであると黒柳は評価している⁽⁸⁾。中身は杵物語⁽⁹⁾でその中には美しく鋭利な詩的警句・金言・諺・喩が織り込まれている人間と動物の共演するドラマである⁽¹⁰⁾。

次にペルシア語版『カリーラとディムナ』の翻訳について述べる。ペルシア語訳では3人の翻訳者が有名である。1番目は「ペルシア詩の父」と言われていたルーダキー（940年没）の散文訳である。ルーダクの出身で初めは吟遊詩人だったが、サーマン朝に仕えナスル2世に厚遇され「ブハーラー宮廷の華」と謳われた詩人である。彼の作品は『カリーラとディムナ』（アラビア語を基に散文で）をはじめ、1万8千以上の作品を残したが、現在115対句が残るのみであり、ペルシア語訳のものは残っていない。

そして2番目がナスルッラー・ムンシーによる翻訳で、前述のように、本抄訳はこれを日本語に訳したものである。ナスルッラーは文人であり政治家でもあった。ガズナ朝シーラーズ出身の名門の家族の一員としてガズナで生まれた。彼はガズナ朝（955/977-1187）のディーワーン（政庁）の秘書官として仕えていた。ガズナ朝最後の君主、ホスロー・マリク（在1160-86）の下で宰相の地位まで昇ったが、なんらかの理由で汚名を着せられ、獄中で殺された⁽¹¹⁾。翻訳は1144年頃の作品だと推定されている。彼の翻訳は現在まで上品なペルシア語の文体の手本として⁽¹²⁾、現代のイランの絵本にも数多く使われている⁽¹³⁾。

なかでも最もよく知られているのは『アンワール・イ・スハイリー』（天蓋の光）と呼ばれる書であり、カマル・ウッディーン・フサイン・ワーイズ・カーシフィー（1505年没）がナスルッラーの『カリーラとディムナ』を底本としてこの書を著したものだ。同書の序文の中で、平易な表現にして多くの人に読まれるように書いた⁽¹⁴⁾と述べている。ナスルッラー訳が書記として書き言葉、特に公文書の影響を受けたのに対して、カーシフィーは説教師として話し言葉を重視したようだ⁽¹⁵⁾。

本稿で抄訳したテキスト⁽¹⁶⁾はイランのテヘランで公刊されているナスルッラー・ムンシー訳ミナヴィー校正『カリーラとディムナ』（ヒジュラ歴1392年版、西暦2013-

2014年版)である。これとアラビア語のイブヌ・ル・ムカッファイ著(アッザーム版⁽¹⁷⁾1941年版)から菊池淑子が訳した平凡社版を参照した⁽¹⁸⁾。筆者が知る限り、黒柳恒男が「ペルシア文学におけるカーレーラとディムナ」⁽¹⁹⁾にナスルッラーの『カーレーラとディムナ』について論じたものはあるが、ペルシア語の『カーレーラとディムナ』⁽²⁰⁾は日本語訳が出ていないので、ここに抄訳を試みるものである。ナスルッラー版を使用した理由は、現在までに刊行されている『カーレーラとディムナ』のペルシア語版の中で前述のように文体が上品なペルシア語であると思われることと、イスラーム歴史事典⁽²¹⁾で最良の版であると評価されるという意味で、最も正統派だと言われているものだからである。その中で第三章の「数珠かけ鳩」を選んだ理由は、本書のアラビア語版からの日本語訳によると、話の筋が倫理、友情、協力といった側面で描かれていて、最も興味深いためである。日本語版と拙訳との比較については脚注に示した。

本抄訳の意図は日本におけるペルシア語版『カーレーラとディムナ』を紹介すると同時に『カーレーラとディムナ』研究に多少とも資することにある。現在、日本ではアラビア語版が刊行されているので、ここにペルシア語からの翻訳を發表することにより、これらの比較により『カーレーラとディムナ』を介して行われてきた豊かな国際交流の一端を知る手がかりとなれば幸いである。

抄訳

「数珠かけ鳩とハトとカモシカとカラスとネズミとカメの章」

* [] は意味をわかりやすくするため筆者が補完したもの。

*ナスルッラーがアラビア語をペルシア語訳にする際、アラビア語の原書になかったペルシア語の詩・対句、及びクルアーンのアラビア語、アラビア語の詩・対句をアラビア語で挿入している。

王はバラモンに言いました。「二人の友達の喩を聞いた。彼らが中傷・誹謗・唆しという打撃により、いかに互いに苦しめあったか。敵意と戦いへと傾き、ついには一人の罪のない者が殺され、そして運命がその[殺害者である]者に報いを与えたのか。なぜなら神——彼の名に荣誉あらんことを——の造りしもの[である人間の体]を毀損することは祝福されぬことであり、その結末は必ずや厳しい責め苦になるだろうからだ。

殺害に関しては法を越えさせてはならない。

本当にかれは（法によって）求護されているのである。⁽²²⁾

今度は、もしできるのなら、心を一つにした友人たちの話を語ってくれないか。彼らがどのような交わりを持ち、どのようにして友人になったのか。誠実な友情からどのような果実に恵まれ、誠意の結果をどのように享受したのか。」

バラモンは言いました。「いかなるものでも賢者たちにとって、誠実な友情に匹敵するものは何もなく、心を一つにした友達と対等の座を占めるものはありません。安楽な時には良い交わりを彼らに求めることができ、苦しみの時には誠実な助け合いを彼らから期待できるのですから。」

彼が災難の中に居る時、彼らは彼らの同朋に尋ねることはしない。人々は彼らの同朋に彼がクルアーン⁽²³⁾として言ったことに関して尋ねることはない。

《アラビア語》

「これについての喩話には、ハトとカラスとネズミとカメとカモシカの物語があります」。王は尋ねました。「それはどのようなことか？」彼〔バラモン〕は言いました。「語られているところでは、カシミール地方⁽²⁴⁾に素晴らしい狩場、気持ちの良い草原がありました。その薫り高い草を映せば、カラスの羽もまるで孔雀の尾のように見えるのですが、その美しさの前には孔雀の尾もカラスの羽のよう、というものでした。

そこではチューリップが灯籠のように輝いているが
しかしその〔ランプの〕煤のため、魂には焼印が押されている⁽²⁵⁾

ヒナゲシは一本足で立ち
エメラルドの枝の上の葡萄酒の盃のよう

《ペルシア語の詩》

ヒナゲシは露を運んでいる
それはあたかも処女たちの頬にある
子どものようにふるまう涙のようである

《アラビア語の1対句》

そこには獲物が沢山おり、猟師たちが絶えずそこにやって来ていました。そこに一羽のカラスがその〔草原〕の大きく高い木の上に住处をもっており、座って左右を眺めていました。突然、恐ろしい顔つきの、非常に頑強な身体と粗い皮膚をもった一人の猟師が、一つの罾を首に掛け、手には杖を持って、その木に向かって来ました。⁽²⁶⁾ カラスは恐れて独り言を言いました。「この男は何か用があって来るのだろうか。私を狙っているのか、誰か他の者か、わからない。ともあれこの場に居て、彼が何をするか見ていよう。」

猟師が進み出て、罾を開き、穀物を撒いて、隠れ場に座りました。一刻ほどして⁽²⁷⁾ 一群のハトがやってきました。その指導者は彼らが数珠かけと呼んでいたハトであり、彼女に従い服従しながら日々を過ごしていました。彼ら〔ハトたち〕は穀粒を見るや否や、不注意にも降りてきて、みな罾にかかってしまいました。猟師は喜び、彼らを捕えようと、悠悠と歩んできて、かがみ込みました。ハトたちは動揺し、各々が自分だけを〔逃がそうと〕努力しました。数珠かけは言いました。「争っている場合ではない。皆が、自分が逃げ出すことより友達を逃がしてやる方が大切だと思うようであれば、この状況でなすべきは、皆が協力して罾をそこから外すことだ。私たちが解放されるには、そうするしかない」。ハトたちは彼女の命令に従いました。彼らは罾を引き抜き、一群となって飛び上って網を持ち去ろうとしました⁽²⁸⁾。猟師はハトを追って立ち上がりました。結局は疲れて落ちてくるだろうと期待したのです。カラスは独り考えました。「私は彼らの跡をついて行って、彼らのこと(事)の結末がどうなったのか知ろう。なぜなら私もこのような事件から、安全でいられるわけではないのだから。この経験によって、災難を取り除く武器を作ることができるものだ。」

数珠かけは猟師が〔ハトたち〕の後をつけているのを見ると、ハトたちに告げました。「この残酷なことをする奴めは、本気でハトを捕えるつもりだ。このまま、ハトが彼の目から見えなくならない限りは捕まえることを諦めることはない。とるべき道は人が住む場所や木々が茂る場所へ行くことだ。そうすれば彼の目は、私たちを見失うことになる。すなわち私たちを見失うと、失望して、諦めて帰るようになるだろう。この近くに私の友達のネズミがいる。彼にこの罾の縄を切ってくれるようにと私は頼もう。」ハトたちは彼女の指示に従って、進路を曲げました。猟師は〔ハトたちを見失い、諦めて〕戻って行きました。そしてカラスは、ハトたちがどうやって〔罾から〕出るのかその目で見て、自身の日々の蓄え〔=将来何かあった時の知恵〕にしようとそのまま進んでいきました。

数珠かけたちはネズミの住処にたどり着きました。彼女はハトたちに「下に降りろ」と命じました。彼らはその命令に従い、皆は〔地に〕降りました。そのネズミはザブルという名でした。完全な賢明さと高い知恵を持ち、暑くも寒くもなる世を眺め、ことの有様が良くも悪くもなることを見てきました。その〔暮らしている〕場所には、災難があった時の逃げ場として百の穴を作っていましたが、それぞれの穴が別の穴に繋がっていて、それを英知に基づき、得策に従って管理していました。数珠かけは、声をあげました。「出てきてくれ！」ザブルは訊ねました。「誰だ？」「数珠かけだ」と名のりました。〔ザブルは〕それと知って急いで外に出てきました。

彼〔ザブル〕は友達〔数珠かけ〕が災いの縛に捕らわれているのを見ると〔ザブルの〕両目の水路（涙腺）が開き、頬に小川のように流れました。そして彼は言いました。「おお、愛しい友、気の合う友人よ、君をこの苦しみに誰が投げ込んだのだ？」彼女は答えました。「様々な善と悪も、運命によって開き閉じるのだ。永遠なる命令に服した者はすべて、もし世に逆らっているように見えても、それから遠ざかり身を守ることは叶わないのだ。

そして運命の縛めを回避し、
自分を守る個々の出来事を救済することなく、
その出来事を救済することなく、
山々が堅いように〔どっしりとして動かない〕
首輪の如き縛めに裂け目はない。

《アラビア語の詩》

天の運命が私をこの奈落に引きずり込んだのだ。穀粒を私と仲間たちに見せつけ、心を飾り立てて〔曇らせ〕、その埃で目の光を覆い、理性の上に暗い覆いをかけたのだ。そしてわれら全員が災難の手と不幸のかぎ爪に落ちてしまった。私よりも力も勢威もあり、権勢と地位で抜きん出た人々であっても、天の運勢に抵抗することはできないし、このような災難は彼らにも無縁の、驚くべきことではないのだ。〔神の〕命令が下ればいつでも日輪は暗くなり、月の姿も黒くなる。そして神—その力に荣誉あれ、その言葉が高くあれ—のご意志は魚を水底から高みに引き上げ、鳥を天頂から奈落へ引きずり下ろす。無知な者を勝利させ、賢い者と彼の求めるものの間を遮るのだ。」

ネズミはこの話を聞き、すぐに数珠かけを縛っていた縛を切ることに取り組みました。〔数珠かけは〕言いました。「まず初めに仲間たちの縛を解いてくれ。」ネズミはこの言葉に取り合いませんでした。数珠かけはまた言いました。「おお、友よ。まず仲間

の縛を切ることが先だ。」

[ネズミは] 言いました。「この話をまたするのか。君には自分自身の命が必要ないのか、それが自分の当然の権利だとは考えないのか？」[数珠かけ] は言いました。「このことで私を非難しないでくれ。私はこのハトたちの指導者の役目を引き受けているのだ。彼らは私に対して権利がある。彼らは[私に] 服従し忠告[を受け入れる] ことで私の様々な権利を認め、彼らの協力と支持を得て私は獵師の手から逃げる事ができたのだ。だから私にも、指導者として必要な義務を果たさなければならず、長の義務を履行しなければならない。また、もし君が私の縛を外すことから始めれば、[それで] 疲れてしまって、彼らの一部が縛られたままになってしまわないか、不安だ。私が縛られたままであれば、たとえ君がすっかり疲れてしまっても、私の縛をほどかないで良いとはならないだろう。良心がそれを許さないだろう。また災いの時にもともにあり、解放される時にも一緒である方が良いだろう⁽²⁹⁾ そうでなければ、誹謗者たちに蔭口を叩く機会を与えてしまうだろう。

正に最も優越な被創造物は悲しみのときあなたを憐れむ者のために喜んであなたが彼を憐れむことである。正に高貴な者たちは(生活を)安寧にさせると、粗末な家で彼らに親しくしていた者を思い出す。

《アラビア語》

ネズミは言いました。「寛容な人々が常とするのがこれであり、友情の持ち主が信条とするものは、君の友情の中のこの称賛すべき性質と素晴らしい行い故に、さらに清らかになるのだ。」それから、真剣に熱心に彼らの縛を全て裁ち切りました。そして数珠かけとその仲間たちは自由に安全になって帰って行きました。カラスは、ネズミが[ハトたちの] 縛を裁ち切るのを手伝うのを目撃し、彼らの友情、誠意、兄弟のような愛情、忠誠を欲しいと強く感じ、独り言を言いました。「私もハトたちに降りかかったことから逃れられず、このように有能な者の友情を必要とせずにはいられないだろう。」ネズミの穴の傍にカラスが行き、大声でよびかけました。「ネズミは」訊ねました。「誰か。」[カラス] は言いました。「私です。カラスです。」そしてハトたちを追いかけてきたこと、彼[ネズミ] の素晴らしい盟約と溢れる献身を知ったことをまた述べたてました。「私はあなたの完全な溢れるほどの義侠心を知りました。あなたの友情の果実がハトたちのためにどれほど素晴らしいものだったか、あなたの友情という祝福のお蔭で、あのような恐るべき渦からどうやって全員が解放されたかを知りま

した。ただあなたの友情が欲しいと意志を固めました。君と友誼を結ぼうとして来たのです。」

注

- (1) パンチャタントラは寓話文学集の中において世界で最も古く書かれ、かつ極めて広く世界に翻訳され、流布した古代インドの寓話集である。本報告では、宗 茅生訳『梵語直訳 五章の物語』、平凡社、1965 を使った。
- (2) 日本イスラム協会監修『新イスラム事典』、平凡社、2002 年。
- (3) 下中邦彦編『アジア歴史事典』、平凡社、1985 年、240 ページ。
- (4) イブヌ・ル・ムカッフアイ著、『カーラとディムナ』菊池淑子訳 平凡社東洋文庫、1978 年。
- (5) 注 (3) と同様。
- (6) 狭くはマニ教、広くは表面上イスラーム教徒でありながら、内心ゾロアスター教、マニ教などを信じることを意味するアラビア語。(『イスラム事典』— (2) の旧版 東京大学東洋文化研究所ホームページより)
- (7) 黒柳恒男著「ペルシア文学におけるカーラとディムナ」、『オリエント』、12 巻 1・2 号、1970 年 pp.1-16。
- (8) 注 (7) と同様。
- (9) 枠物語—登場人物が作中で別の物語を語る形式で展開する物語。
- (10) 注 (7) と同様。
- (11) 注 (7) と同様。
- (12) 注 (7) と同様。
- (13) 筆者がイランの絵本を直接仕入れて販売する展示即売会で、『カーラとディムナ』の一部を使用した絵本 2 種類を見かけた。
- (14) 注 (7) と同様。
- (15) 注 (7) と同様。
- (16) Monshi, N. (2014) “*Kalila va Dimna. Corrected by: M. Minavi,*” Amir Kabir [InPersian], Tehran, pp.157-190.
- (17) アッザーム版 アラビア語訳の原本の内が一番古いと言われるシャイハウ版より 100 年以上早い 1221 年の日付をもつ写本で、綿密な比較検討と慎重な工程のもとに 1941 年カイロで翻刻されたもの。
- (18) 注 (7) と同様。
- (19) 注 (7) と同様。

- (20) 注 (16) と同様。
- (21) Afmad S.Moussalli “*Historical Dictionary of Islamic fundamentalist movement in the Arab world, and, Iran, and Turkey,*” scarecrow Press、1999、 pp.1016～1017. この本のナスルッラー・ムンシーの項目の中に「断然、現在手に入る版の中で最も良いのがこの版である」と書かれている。
- (22) 宗教法人日本ムスリム協会編集『聖クルアーン』2000年、夜の旅章、33節 p.344。
- (23) 宗教的確信と訳した方が良いのかもしれない。
- (24) イブヌ・ル・ムカッフアイ著 菊池淑子訳 前掲書 p.141 にダスタード国のマーラワートとなっている。
- (25) チューリップの花芯にある黒い斑点を、魂に押された烙印（愛の苦しみ）に喩え、灯籠（チューリップの花の比喻）から出る煤によりついたものだとしている。
- (26) 宗 茅生訳『パンチャタントラ「五章の物語」』昭和40年平凡社 p.151 より獵師の形容の参考にした。
- (27) ペルシア語訳では1時間となっていたが菊池訳では1分もたたないうちとなっていた p.142。
- (28) 宗 茅生訳前掲書 p.153
- (29) ネズミがハトたちの縛を切る仕事から解放されるのと、数珠かけが縛から解放されるが一緒であるのが良い、ということだろう。

参考文献

<和書>

- 榎屋友子『イスラームの写本絵画』名古屋大学出版会、2014年。
- 榎谷友子『すぐわかるイスラームの美術 建築・写本芸術・工芸』東京美術、2009年。
- 田中於菟弥・上村勝彦訳、アジアの民話12『パンチャタントラ』株式会社 大日本印刷、1980年。
- 辻 直四郎『サンスクリット文学史』岩波書店、1973年。
- 富塚俊夫「仏教とイスラム教(4) 釈尊とアラビア寓話集『カーリーラとディムナ』」、中東協力センターニュース、1997年9月。
- マノラマ・ジャファ（国際児童図書評議会インド支部事務局長）「パンチャタントラー世界で最も古い子どものお話」の講演録、2004年。
- 松村武雄訳『古典文庫インド古代説話集—パンチャタントラ—』現代思潮社、1977年。
- 世界文学大事典 項目パンチャタントラ、集英社、1996—98年。
- 岩本裕訳 筑摩世界文学大系9 インド・アラビア・ペルシア筑摩書房、1985年。
- ブリタニカ国際大百科事典16 TBSブリタニカ、1996年。

- 世界大百科事典 23 平凡社、2007 年。
- アジア歴史事典 平凡社、1985 年。
- ハミルトン・A・R・ギブ著、井筒豊子訳『アラビア文学史』、人文書院、1982 年。
- 黒柳恒男著『ペルシア文芸思潮』、近藤出版社、1977 年。

<洋書>

- Bernard O' Kane “*Early Persian Painting - Kalila and Dimna Manuscripts of the late fourteenth century,*” I.B.Tauris、2003.
- Encyclopedia Iranica.
- Ibun Al-Mokaffa (Translation into Arabic) “*Kalilah wa Dimnah,*” Dar Al Kotob Al Ilmiyah, Beirut-Lebanon. (10) アッザーム版 アラビア語訳の原本の中で一番古いと言われるシャイホウ版より 100 年以上早い 1221 年の日付をもつ写本で、綿密な比較検討と慎重な工程のもとに 1941 年カイロで翻刻されたもの。
- Iwase, Y. (岩瀬由佳) “*The Development of Selected Stories from the Pancatantra: Kalilah wa Dimnah*” –*Genealogical Problems Reconsidered on the Basis of Sanskrit and Semitic Texts* – Seizansha、1999.

【謝辞】ペルシア語の翻訳のご指導をいただいた渡部良子先生(日本大学非常勤講師)及び檜 晶先生(アラビア語塾塾長)に深謝します。